

練習船のここだけの話 Vol.8

乗船実習

1. はじめに

私は、水産大学校の専攻科を修了し水産庁の船舶職員として採用されて直ぐ、本校の練習船 耕洋丸の三等航海士に配属となりました。本校在学中を含むと30年以上、ご縁あって本校にお世話になっています。現在は練習船天鷹丸の船長という大任を拝する中、練習船の現役乗組員として、「乗船実習」についてお話ししたいと思います。

2. 乗船日

乗船学生は決められた乗船日時までに乗船すると、練習船担当教員（航海士、機関士が担当します。以下、担当教員。）と学科担任が調整を行い、6班を編成します。1班が定員4名から6名の居室に割り振った班編成表に従い、先ず行われるのは自分のベッドの争奪戦です（図1）。

各居室は2段ベッドが配置され、カーテンで仕切られた、一畳よりやや広いベッドスペースが唯一のプライベート空間となるわけですから、自分のベッドの位置は比較的重要であることは、想像し易いはずですが。争奪戦といっても、話し合いや、ジャンケンといった平和的方法で解決されます。その後、船内教室に集合し乗船式を行った後、各班に分かれ、担当教員から船内生活についての諸説明を受け、実習が開始されます。



図1 乗船日の居室における恒例行事

3. 右舷班と左舷班

乗船学生は6班編成とすると述べましたが、更に、船体の右側（右舷）に居室が配置される奇数班を右舷班、船体の左側（左舷）に居室が配置される偶数班を左舷班とします（図2）。片方を3班にしてあるのは、航海当直（ワッチ=Watch）の時間割、午前0時～午前4時（正午～午後4時）の通称「ゼロヨン直」、午前4時～午前8時（午後4時～午後8時）の通称「ヨンパー直」、午前8時～正午（午後8時～午前0時）通称「パーゼロ直」の3交代制に合わせた実習を行うこと

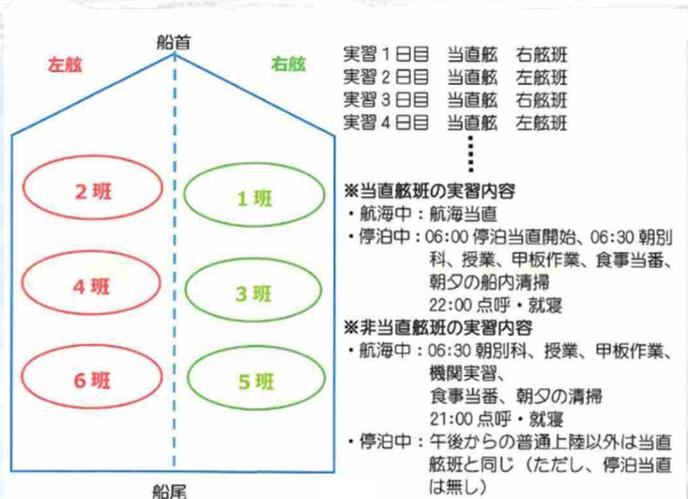


図2 乗船実習の当直における班の編成例

に起因しています。実習初日は、概ね右舷班を当直舷（とうちよくげん：当直を担当する班がある場所を船の舷で表す。）とし、左舷班を非当直舷として、1日毎に当直舷と非当直舷を交代（航海中は午後8時、停泊中は午前8時に交代。）し実習を行います。

3. 当直舷の課業

航海中の当直舷は、航海当直実習が主体となります。先ほど述べた、ゼロヨン直、ヨンパー直、パーゼロ直の時間帯の航海当直に入直し、担当の航海士や機関士の指導を受け、海技士として知識・技術を習得していくのですが、本校の練習船は漁業調査船としての機能も有しているため、併せて海洋調査や各種漁業についての知識・技術も習得していきます。停泊中は通常の場合、午前6時からヨンパー直の停泊当直を開始します。途中、午前6時半からの朝別科（ラジオ体操等）の参加や交代で朝食を取り、午前中に授業や実習等があるときは停泊当直を一旦離れ、午前の課業が終了次第再び担当時間帯の停泊当直に戻り、点呼等が行われる午後10時まで続きます。

4. 非当直舷の課業

航海中の非当直舷は、午前6時半からの朝別科で一日が始まり朝食後、午前中は主に授業、午後から甲板作業や機関実習を行い、海洋調査を行うときは調査班の一員として実習を行います。毎食の食事当番（配膳や食事後の食器洗い、後片付け）は本舷が担当し、午後9時からの点呼・船内見回りに備え、午後8時半頃から船内の清掃を行います。停泊中については、当直舷と同様に朝別科や午前中の課業を行い、午後からは、楽しみの一つである上陸が可能となり、帰船時間は点呼等が始まる午後10時としています。因みに、海洋・水産施設の見学を含む1日バス旅行のイベント等、少々息抜きができる日も設けてあります。

5. 乗船実習の苦楽

安全な航海を行うため、船内で守るべき多くのルールがあり、乗船学生も当然ルールを守ることになります。ただでさえ不慣れな団体生活の中、多くのルールに縛られ、更には物心ついた頃から常用しているスマートフォン等が、圏外により使用できない状況は学生にとって、かなりのストレスだと思います。しかし、乗船実習は厳しいことや辛いことだけではなく、大自然の中に身を投げ、昼間は果てしない空と海（図3）に、夜は満天の美しい星空に心躍らされ、運が良ければクジラやイルカ等、色々な海洋生物の歓迎（図4）を受けます。



図3 インド洋にて



図4 イルカのお出迎え

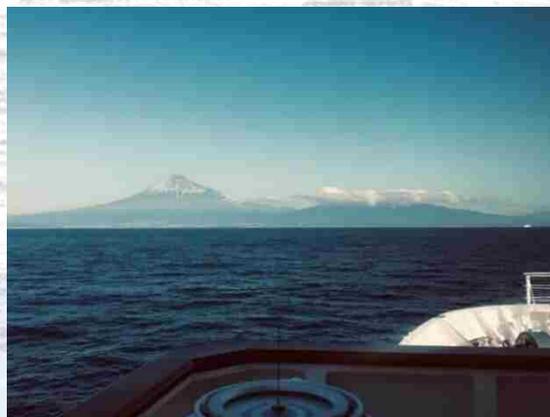
また、漁業実習等では多種多様な魚介類に触れられることは、生物好きにはたまらないと思いますし（図5）、更に、初めて訪れる寄港地での上陸もとても魅力的です。



図5 マグロはえ縄操業実習 メカジキ

6. 最後に

12月に行った「乗船実習」の北西太平洋公海におけるマグロはえ縄操業実習の帰路、船橋で、ワッチを行っている専攻科生と以下のような会話をしました。私、「スマホが使えず、下をむかなくて済むからこんな生活もたまには良いでしょうか?」、学生、「そうですね（笑顔）。」おそらく、随分気を遣ってくれたのだと思いますが…。情報が溢れ慌ただしい日常から少し離れ、自分自身を見つめる時間が多くあり、また、共同生活によって、我慢強さや他人を認め思いやる気持ちといった、世に出るために必要な力がいつの間にか鍛えられることは、乗船実習の大きな利点と思うのです。



付図 駿河湾にて

(水産大学校 天鷹丸船長 富賀見 清彦)